

俳句雜誌



空
令和4年4月20日発行
第20巻1号
通巻第101号



2022・4・5

SORA 101号

霊山

柴田佐知子

動乱のやがて火柱もがり笛

真黒な山の雨来る葉喰

極月や神樹に古りし力瘤

鎖巻き付けて修験の山凍る

極むれば鬼となるらむ冬銀河

大仏と万巻収め山眠る

雪原の窪みとなりて川一筋

—「W E P 俳句通信」125号より—

春の雪肌着に通す赤子の手

宴へと泳ぐ自魚運ばるる

朧夜や山を脱け出す磨崖仏

海底に貼り付く魚や仏生会

一礼の僧侶をつつむ花吹雪

花筏割りたる鮎のさくら色



福岡 高倉 和子

東京 中田 みなみ

発車まで虫の鳴きつぐ無人駅

茶柱に雪解雫のきりもなし

従臣のやや小振りなる菊人形

巻尺のもどる音して春近し

湖に光集まる紅葉山

啓蟄や児の音読にうなづきて

竹林の中のひだまり冬はじめ

ふうせんの余力地を這ふ目借時

極月や湯気立て洗ふ白と杵

なつかしげに鯉のすり寄る種袋

商談のはじめ誉め合ふ暖房裡

蜂蜜に花菜と記すや目に溢れ

カトレアや言葉を略す通夜の席

妃殿下の会釈さくらの乾門

寒禽や大釜に炊く山のもの

灯を長く電車過ぎゆくさくらかな

長崎 荒井 千佐代

埼玉 服部 早苗

海底の藻の揺れ想ひ海鼠噛む

大玉がいふこときかぬ運動会

一艘のための栈橋冬満月

稲刈りの棚田いちにち海静か

仮の世の仮の身大事厚着して

潮入の港に汽笛冬隣

点滴や雪降る音と思ひつつ

茶の花に太白星のともりゐる

焼諸屋ミサが了はれば声高く

会釈して浄域過ぐる今朝の冬

寒雷や舢の浮子はドラム缶

ポップコーン買って座席に沈む冬

大年の鶏が国道渡りをり

凍鶴の真つ直ぐな脚踏み替ふる

凍蝶が発てりマリアの素足より

服喪する人に文書く帰り花



北九州 深川淑枝

野阜に日の香十月桜咲く

蛇行してちぎれし河やをみなへし

鍾乳洞は花野の下よ目なし魚

水澄むや影より淡く陸封魚

冬の崖ナウマンゾウの化石抱き

アンモナイト太古の海の冷えを持つ

窯に焚く松割りためて冬隣

秋冷や窯火見つめし目のくぼみ

広島 戸栗末廣

曼殊沙華農道はまた下校みち

鶏頭のまはり荒草なかりけり

初鴨を迎ふる水の真つ平ら

竹林を行く水音も秋の声

どの雲も生れたてなり花晶

闇喰うて芋虫かくも美しき

溝蕎麦や風に散らばる水の音

仰ぎつつ掃きつつ銀杏黄葉かな

福岡 角野良生

盆踊り遠き一揆を唄ひ継ぐ

露草やいまも埋め墓詣で墓

かみ合はぬ話に一葉落ちにけり

鷹渡る修験の山の崖鎖

海鳥の乱舞の芯に鯛船

根釣人余りし餌を撒きて去る

鮎刺盛りて織部の深みどり

綿虫を壊さぬやうに通りけり



熊本

松田明子

稲雀一座のやうに来たりけり
 歓声の移つてゆきし紅葉狩
 天地にたちまち千羽万羽鶴
 鶴の宿隅に布団の重ねあり
 真青な空を残して鶴帰る

直方

石橋幾代

返り花蕾二つをつけにけり
 積み上ぐる蒲団で遊ぶ子を叱る
 藁屑の吹かれてゐたる秋収め
 闇汁に海の匂ひのありにけり
 湯冷めして今日が白紙となる思ひ

太宰府

山本則男

石庭の波崩しゆく秋の蛇
 鬼やんま一言居士の貌したり
 古稀の日の古稀の風吹く虚栗
 芒野の風の広さとなりけり
 どの道も混み合つてゐる大花野

須恵

苑実耶

冬うらら入院食のビスケット
 点滴は赤白黄色春立ちぬ
 小春日や毛づくろひめく抜け毛処理
 白髪染め止むれば自在鳥の恋
 退院や抜け毛を隠す春帽子

粕壁

吉田 菫

天王星の傾き正す夢はじめ
 歩行器の稚乗り上ぐる福笑
 鶏仰ぎ犬は俯く寒の葬
 いろり火に熊の鉤爪つやつやと
 村中が鬼の子孫や火の用心

広島

星加鷹彦

もう少し生きてみたくて種を採る
 いちやう散る金の鱗を剥ぐやうに
 干乾びてなほ鮮やかや鴟の糞
 寒晴や水切り石は水を削ぎ
 綿虫の空青ければ青くとぶ

千葉

原 友子

開拓に始まりし村冬銀河
 赤き実のひたすら赤く年つまる
 大櫛裸にしたる落葉焚く
 ふくろふや一枚板の坊の卓
 冬耕の息鎮めんと杭になる

長崎

松尾龍之介

桔梗も星も何ゆゑ五角形
 上げ潮の極みゆるやか鯉跳ぬる
 稲すずめ発つて大地をめくりけり
 日溜りと落葉溜りの階の下
 板塀に節抜けの穴冬に入る



大野城

森田明成

一両車待つ間も旅や秋の雲
見慣れし家少なくなりぬ秋の風
一つ家に虫も逃げ込む嵐かな
爽やかや明日またねといふ声も
行く秋の風に疲れし一人旅

大阪

田岡千章

金木犀墨書に掲示伝導板
きちきちの蹴りて銅鐸出土の田
熟柿吸ふ嘗て健康優良児
十三夜髪型すこし変へて妻
そぞろ寒十五手詰の棋譜思案

長崎

仲里奈央

和音弾く五の指弱し天高し
ひとつづつ思ひ出失くす母野菊
母にだけ逢ひに来るちち曼殊沙華
敵味方どうでもいいや冬薔薇
友といふしあはせ数へ賀状書く

北九州

河原敬子

はたくたび埃出す馬花カンナ
天高し児の手綱にも馬応へ
竜のごとき松の根は神冬ぬくし
弾力に足裏喜ぶ落葉道
枯草のあたりぬくかろ群雀

北九州

坂口学

風紋の砂塵となりぬ花海桐
蛇の目の白し脱皮の兆しかな
鍋蓋を落し沢蟹這ひ出づる
島畑のはては切り岸鳥渡る
どれもこれも毒あるやうな茸かな

岡垣

田中とし江

池普請土手に見てゐるだけの人
泥鯉の目ばかり澄むや池普請
魚追ひ込む太き掛け声冬日和
池干しや泥の底ひを石叩き
泥吐きし鯉さげてゆく寒見舞

兵庫

大西乃子

夕べより昼間淋しきちろ虫
絡みつつ石垣上る蔦紅葉
霧深き港にくはへ煙草かな
退屈と隣合はせや虫の声
罪人のやうに大根干されあり

直方

曾根富久恵

石蹴りの子の影長し金木犀
学校の窓の標語や冬に入る
新聞で包む陶器や小六月
花八つ手乾ききつたる手水鉢
本殿の裏は城跡冬紅葉

福岡 あさなが捷

赤ん坊がころがつてゐる煤ごもり
冬日浴び途方にくるるだんご虫
寒北斗地球コトンとかしぎけり
オリオンやどれも首垂れシヨベルカー
地球儀の紺は海溝春うれひ

北九州 横田敬子

この代で閉づる牧場雁渡る
秋刀魚焼くだけの七輪買ひにけり
縁側に猫が留守番冬ぬくし
昭和より続く名画座小鳥来る
言ひ難き事も言ひます唐辛子

直方 吉田悦子

身の上を少し話して温め酒
白黒をつけたき夜の根深汁
北窓を塞ぎてまるく眠りけり
マスクしてエレベーターを譲り合ふ
母乗せて操縦桿引く冬日和

大阪 井上和子

指先のささくれ桜紅葉かな
拳もて拭ふ目頭夕花野
秋天や幡翩翻と牛の競り
擦り傷のかさぶた痒し草の花
新藁を鋏もて均し畝作り

福岡 三井所美智子

秋耕の石塊ひとつなかりけり
盗掘の勾玉戻る草の花
秋風や更地となりし友の家
どんぐりの転がり溜まる王墓かな
測量を終へし冬田を買ひにけり

東京 今井康子

伐採を待つ木にリボンましら酒
蔵書印に父の性格竜の玉
鹿の糞踏まねば行けぬ東大寺
キャンバスは茅葺屋根や紅葉降る
冬桜彼の世の花と思ひけり

東京 山田正子

曼珠沙華宛先不明の手紙かな
秋の暮一人づつ減る鬼ごっこ
蕎麦の花地平線より白き風
行き止り猫と困通り抜け
決断をせまられマフラー締め直す

神奈川 窪みち子

門川に唄声流れ風の盆
星流れ父母なき故郷遠ざかる
天高しおどろおどろの硫黄谷
黄河滔々黄落急ぐどろやなぎ
点在の島名指しつつ浜焚火